

【中学部】これだけは知っておきたい受験用語

今回は、高校案内やパンフレットによく出てくる「受験用語・受験知識」をいくつか解説します。まずは必ず知っておきたい用語をピックアップしました。中1・中2のみなさんも今のうちから知っておくと良いですね。ぜひチェックしておいてください。

【調査書】

中学校から高校へ提出する受験生の成績などをまとめた書類です。各教科の評定(5段階の内申)、出席の記録、総合の時間の記録、特別活動の記録などがありこれらが選抜時に調査書として評価されます。

また、とくに都立一般一次入試の場合、**実技教科の換算が2倍**され点数化されます。

$$(英+数+国+理+社) \times 1 + (音+美+保体+技家) \times 2$$

日頃から(1~2年生のうちから)授業態度を含め決して手を抜いてはいけませんね。また期末・学年末テストでしか挽回できないこともあります。暗記科目だからといって一夜漬けにならないようにしましょう。

【内申基準】

私立高校が推薦基準や優遇基準を内申点で示したものです。学校ごとに「5科17以上」や「9科36以上」など示されます。一般的に、これらの基準を満たしていれば入試当日大きな失敗をしない限り、合格をもらえます。しかし、私立上位校入試の場合、「出願基準」として示されている場合があり、基準を満たしていなければ出願もできません。

【加点措置】

上記の内申基準に達しない場合など、英検・漢検・数検の資格取得や生徒会活動、部活動の実績などを内申点として加算することです。基準に達し、受験可能になる場合もあります。ただし、学校ごとに加点の設定は異なります。

【特待生制度】

私立高校入試にて、入試成績が特に優秀な受験生に対して、入学金や授業料の免除といった特典が与えられます。きわめて高い内申基準や入学試験での成績基準が設けられていることが多いです。またスポーツ特待などもあります。3年間授業料免除という特典でも、入学後の成績や生活態度などにより打ち切られる場合などもあります。

【グループ作成校／自校作成校】

公立高校入試の学力検査問題は、通常都道府県単位での共通問題ですが、一部の高校ではグループまたは学校独自で問題を作成しています。東京都は第一次募集における学力検査を、自校で作成した学力検査問題3教科(国語・数学・英語)と、都立高校共通問題2教科(社会・理科)により実施します。

該当する種類の高校は次の2種類に分けられています。

①自校作成校

○日比谷・戸山・青山・西・八王子東・立川・国立(進学指導重点校)

○新宿・墨田川・国分寺(進学重視型単位制高校)

②グループ作成校(併設型中高一貫教育校)

○白鷗・両国・富士・大泉・武蔵

これらの高校は問題が難しく、学校の授業だけではなかなか対応ができません。受験を考えている生徒さんは早めに塾に相談してください。



(裏面に続く)

速報!

平成30年度 都立高校『推薦入試』(2/1発表) 合格高校一覧

立川 国分寺 武蔵野北 南平 清瀬 小平 調布南 神代 石神井 小平南 翔陽
武蔵丘 保谷 日野 鷺宮 田無 東久留米総合 千早 久留米西 小平西 光丘
東村山西 府中工業 第四商業 田無工業 練馬 羽村 五日市 東村山 練馬工業

合格おめでとう!

ベスト個別指導塾/ベスト自修館

【小学部】小学校の英語教育が変わります

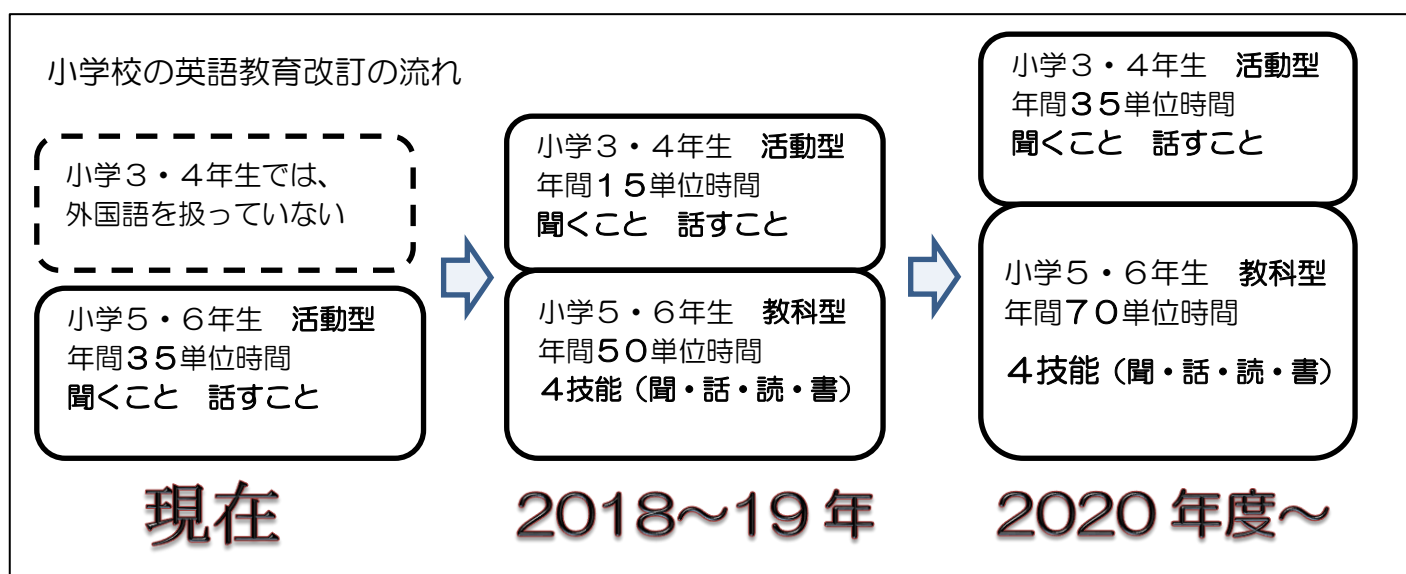
文部科学省では、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を掲げ、英語の教育改革を推進してきました。「新・学習指導要領」が全面実施となるのは2020年ですが、移行措置期間として2018年つまり今年の4月から新たな学習指導が開始されます。今回はこれからの小学校での英語教育について説明していきます。

【外国語活動から教科の英語へ】

現行の学習指導要領では、小学校における英語教育は小学5・6年生で学習する「外国語活動」という「聞くこと」「話すこと」を中心としたものでした（年間35単位）。これが次期学習指導要領では2020年度以降、「読むこと」「書くこと」を中心とした「英語」科目となります（年間70単位時間）。また、3・4年生に「外国語活動」が前倒しされます（年間35単位時間）。

今回の改訂では、小学3・4年生から外国語を「聞くこと」「話すこと」に慣れ親しむことで、外国語学習への動機付けの早期化をはかっており、5・6年生から「読むこと」「書くこと」を加えることにより、中学校への接続をはかっています。

次期学習指導要領への円滑な移行を図るため、2018年度から小学3～6年生には+15単位時間の英語の授業が追加され、2020年より前述の通りに英語の時間が割り当てられます。



（参考文献：旺文社教育情報センター 次期学習指導要領における小学校英語）

【小学5・6年生の英語】

小学5・6年生から「読むこと」「書くこと」が始まることとなりますが、中学生の文法内容が前倒しになるというわけではありません。小学生で学習することは、あくまでアルファベットや単語・文の書き写しにすぎず、文法は今まで通り中学に入ってから学習するそうです。単語の暗記も小学校では扱わないようです。

【中学受検への影響は？】

現在、首都圏の国立・私立中学校で英語を導入している学校は、2014年度15校、2015年度33校、2016年度64校、2017年度95校と年々増加しています。しかし、導入状況としては「選択入試」方式で「英算国理社の5教科必須入試」ではないです。また、基礎的な学校とハイレベルな学校に2極化しています。小学校で英語が教科として扱われるようになりますが、単語の暗記や文法を扱うわけではないことから2020年の英語の教科化に対して受験科目で英語が必修化するという動きは無さそうです。

（参考文献：Educational Network）

【高校部】「ハイスクールタイムズ」に、ためになる記事が多数掲載されており、今月はそちらをどうぞ一読ください。